広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第59号　2010　289－298

日本語母語話者と中国人日本語学習者の談話に見られる視座

― パーソナル・ナラティヴと漫画描写の比較 ―

武　村　美　和

（2010年10月７日受理）

The Use of Viewpoint Expressions in the Personal Telling Task and the Picture Description Task by Native Japanese Speakers and Chinese Learners of Japanese.

Miwa Takemura

Abstract: Previous studies on L2 learner's story telling have shown that the learners are unable to tell stories from a fixed viewpoint unlike native speakers. Most of the studies employ the picture description task as the method of verbal elicitation, which may have affected the results. Therefore, the present study examines the validity of this picture description task by comparing it with the personal story-telling task. Native Japanese speakers and Chinese advanced learners of Japanese narrate on ten topics about their past experiences and tell stories using three comic strips. The results show both native speakers and learners describe their past experiences from the speaker's viewpoint, though some inappropriate use of viewpoint expressions are observed in Chinese learners' narratives. On the other hand, the viewpoints in the data elicited from the picture description task are not unified. The findings indicate that the nature of task affects the use of viewpoint expressions.

Key words: Personal telling task, picture description, viewpoint expression, viewpoint, point of gaze
キーワード：パーソナル・ナラティヴ，漫画描写，視点表現，視座，注視点

１．先行研究と問題の所在

日本語を第二言語として学ぶ学習者の文章は，母語話者の文章に比べ分かりにくいことが，作文研究などにおいてこれまで多く指摘されている（小森 2005，金 2006など）。学習者の文章の分かりにくさに関与する要因は様々であるが，その１つに視座が挙げられる（田代，1995）。視座は，「出来事を見る場所（人物）」を指し（松木，1992），話者が出来事をどの人物寄りに見ているのかにより，用いられる表現が異なる（久野，1978）。以下はその例である。

太郎が花子にお金をあげた。

太郎が花子にお金をくれた。　（久野 1978：141）

話者自身が授受行為に関与する場合には，「あげる」文においては主格に，「くれる」文においては与格目的語に「私」が配置されなければならないという制約があることから，上記の例文においては，それぞれ「太郎」，「花子」に視座[1]があると考えられている（久野，1978）。このように，授受表現や受身表現といった構文的手がかりから話し手の視座が判断されるため，これらの表現は視点表現と呼ばれている。視点表現として代表的なものには，授受表現，受身表現，移動表現などが挙げられるが，そのうち「あげる」「いく」などの動作

本論文は課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：畑佐由紀子（主任指導教員），迫田久美子，酒井　弘，深澤清治

主主語で視座が動作主にある動詞は，行為主体に対する視点的接近がなくとも用いられることから，中立の視座を含むと考えられ（久野 1978），構文的手がかりからは除外される[2)]。

これらの視点表現を構文的手がかりとし，日本語母語話者と中・上級学習者の談話における視座を調べた研究には，田代（1995），坂本・康（2000），魏（2010）などがある。これらの研究においては，筆記による漫画描写を実施し，使用された視点表現から視座の判定を行い，その傾向を日本語母語話者と学習者において比較した。その結果，日本語母語話者は，１人の人物に視座を固定する傾向が見られるのに対し，学習者は複数の人物の視座から描写することが分かった。

また，中国語，韓国語，ドイツ語を母語とする学習者に口頭で漫画描写をさせた渡邊（1996）では，日本語母語話者は視座を判定するための視点表現を多く使用していたのに対し，学習者の発話には構文的手がかりがほとんど見られなかったことを報告している。そのため，渡邊（1996）や，先に挙げた田代（1995）などでは，視座の他に，注視点（「どこ（誰・何）を見るのか」）という観点を加え分析を行っている。

授受や受身表現などの構文的手がかりから判定される視座とは異なり，注視点は，能動文であれば，主節・主文の動作主，受動文であれば被動作主といったように，文の主格に位置する人物（物）から判定され，話者が見ている対象を表すとされている（渡邊 1996）。冒頭に挙げた「太郎が花子にお金をくれた」という文を例に取ると，視座は「花子」で，注視点は「太郎」となる。

この注視点を分析に加えたことで，視点表現の非用により視座の判定が困難であった学習者の発話においても，注視点に関して特徴が見られることが示された。渡邊（1996）の結果から，日本語母語話者と学習者の注視点には，漫画の展開の初めから終わりまで１人の人物の行為に注目している「固定注視点」と，複数の行為を描写している「移動注視点」の２つがあることが分かった。そして，日本語母語話者の談話の多くは固定注視点であるのに対し，学習者の談話は移動注視点である割合が高いという結果が示された。しかしながら，中国語，韓国語を母語とする学習者に筆記による漫画描写をさせた田代（1995）においては，日本語母語話者，学習者共に注視点は移動していたことが報告されており，渡邊（1996）の結果とは一致しない。これは，筆記と口頭という産出方法の違いに加え，使用した漫画の特徴（登場人物の数や描き方など）が影響している可能性が考えられる。それゆえ，データ収集や分析のしやすさから先行研究で多く採用されている筆記による漫画描写で用いられた材料が，口頭産出においても同様の結果を示すのかを検証する必要があろう。

では，上述した学習者の談話に見られる移動視座や，移動注視点は，学習者の文章の分かりにくさや文の結束性にどのくらい影響するのだろうか。移動視座と固定視座の談話理解への影響を調べた研究には，坂本・康（2002）がある。坂本・康（2002）では，日本語母語話者に，固定視座と移動視座の漫画描写（作文）の分かりやすさを判定させたところ，50％の母語話者が，「移動視座のほうが分かりやすい」或いは「どちらも同じ」と回答したことが報告されている。つまり，筆記による漫画描写においては，固定視座は必須ではない可能性が示唆された。

これは，筆記による漫画描写の場合，主語や目的語の人物が省略されることが少ないため，「誰が誰に」という動作の方向性が明白であることが関与している可能性がある（坂本・康 2002）。更に，漫画描写の場合には，自分とは関係のない第三者間の行為について描写することから，視座を言語化する必然性も低く，登場人物のうちどの人物に視座を置くのかについては母語話者でもばらつきがある（魏 2010）。それゆえ，「私」自身に視座を置かなければ不自然になる可能性が高い「私」が関与する出来事について，視座が固定されているか否かをまず見る必要があるのではないだろうか。漫画描写というタスクは，語る内容や出現する視点表現をある程度統制する上では大変有効なタスクではあるが，その語りのスタイルは，日常的に行われる自身の経験を語るパーソナル・ナラティヴとは，大きく異なる。しかしながら，タスクの違いを考慮した研究は管見の限り見られない。したがって，このようなタスクの違いが，視座や注視点にどのように影響するのかを明らかにする必要があると言える。

また，習熟度の観点から視座を分析した魏（2010）においては，視座統一を意識させる群とそうでない群を設定し，視座を比較したところ，レベル上位群は視座統一を意識することで視点表現の使用が増え，日本語母語話者の傾向に近づくことが示されたが，レベル下位群は指示に関わらず，視点表現の使用が少なかった。この結果から，視点表現の習得の度合いが視座統一の意識の有無よりも大きく影響していることが示唆された。つまり，文法項目自体の習得が出来ていない初中級の学習者を対象にした場合，「使えるのに使わなかった」のか，「使えなかった」のかが不明である。それゆえ，純粋に視座の問題だけを見るためには，文法項目自体の習得がある程度できている上級の学習者を対象にすべきであると考える。

2．研究の目的

以上の先行研究の問題点を踏まえ，本研究では，学習者自身の過去の体験を語るパーソナル・ナラティヴと漫画描写タスクにおいて，日本語母語話者と中国人学習者の視点表現の使用や，談話に見られる視座・注視点はどのようであるかを発話データの分析を通して質的に探ることを目的とする。具体的には，以下の２点について検討する。

(1) 日本語母語話者と中国人学習者の日本語の発話に見られる視座と注視点には違いがあるのか
(2) パーソナル・ナラティヴと漫画描写タスクというタスクの違いにより，視座と注視点に違いが見られるのか

3．調査の概要

3.1. 調査参加者

日本語母語話者（以下 NS）３名，中国語を母語とする JSL 環境の日本語学習者（以下 CL）５名（日本語能力１級取得者，学習歴５～6.5年）。

3.2. 材料と手続き

3.2.1. パーソナル・ナラティヴ

材料として，10のトピック[3] を予備調査により選定し，使用した（資料１参照）。調査の手続きは次のようである。１つずつトピックを呈示し，１分間トピックについて思い出す時間を与えた。ナラティヴの際に言葉に詰まり，沈黙することを防ぐため，単語のメモは許可した。その後，１分から２分程度で，トピックについて語らせ，その発話や様子を IC レコーダーとビデオカメラで録音・録画した。

3.2.2. 漫画描写

先行研究で使用されていた５コマから10コマからなる文字情報がない３種類の漫画を使用した（田代 1995, 中浜・栗原 2006, 魏 2010）（資料２参照）。

ナラティヴ同様に，１つずつ漫画を呈示し，１分間漫画の内容を理解する時間を与えた。漫画を見ながらの口頭産出であるため，メモは許可しなかった。その後，漫画の内容について，漫画を見ていない人に教えるように説明させ，発話や様子を IC レコーダーとビデオカメラで録音・録画した。

3.3. 分析方法

調査者自身が書き起こした発話データから視点表現を抽出し，視座の判定を行った。視座判定の際の構文的手がかり[4] は以下のような基準で選択した（表１参照）。

まず，先行研究で多く用いられている授受表現や受身表現，移動表現，使役表現に加えて，ナラティブで頻繁に観察される主観表現や感情表現を本研究では構文的手がかりに含めた[5]。主観表現や感情表現は人称制限があり，第三者の感情を表す際にはモダリティやアスペクトを伴わなければならないという特徴があることから（寺村 1982），先行研究でも，視点表現であるとみなされ，構文的手がかりとして視座判定に用いられている（中浜・栗原 2006，魏 2010など）。

また，発話データに見られる時制の誤り（「教えてもらった」を「教えてもらう」に）や助詞の誤り（「私は先生に教えてもらいます」を「私は先生が」に）は，母語話者であっても見られる誤りであることから除外しなかった。しかし，分析対象は，内容理解に影響しない場合にのみに限定した。構文が正しくとも，前後の文脈から命題関係が誤ったもの（「私は先生に教えてもらいます」を「教えてあげます」に）や，活用や後続する表現が文法的に非文になるもの（「紹介してもらいたい」を「紹介してくれたい」に）は，視座判定の構文的手がかりから除外した。さらに，漫画描写においては，表１の構文的手がかりの中で使用が１例しかなかった使役表現を除き，漫画の内容上多く観察された「貸す・借りる」の動詞の対のうち中立の視座を含まない「借りる」を構文的手がかりに加えた。

表１　視座判定の構文的手がかり

文法項目	構文的手がかり【視座】
授受表現	てあげる／(て)くれる／(て)もらう
使用例	(私のために)お祝いをしてくれました。【私】
受身表現	れる／られる
使用例	私は大手の塾に入れられて【私】，
移動表現	ていく／(て)くる
使用例	(私に)電話がかかってきて【私】，
使役表現	せる／させる
使用例	母は，私を幼稚園受験させ【母】，
主観表現	思う・分かる・考える・感じる　など
使用例	(私は)間違っているじゃないかと思います【私】。
感情表現	感情形容詞：嬉しい・寂しい　など 感情動詞：驚く・びっくりする　など
使用例	(私は)すごく寂しいですね【私】。

一方，注視点の判定は渡邊（1996）を参考に，以下の基準を設定した。

(a) 能動態の文においては，動作主を注視点とする
(b) 受動態の文においては，被動作主を注視点とする
(c) 動作主体が言語化されていない場合には，動詞を手がかりとして動作主体を決定し，注視点とする

渡邊（1996）では，注視点の抽出単位を主節としているが，発話データにおいては従属節が多く，１文が長いため，主節のみを対象とすると傾向を探るに十分な数が抽出できないと考えられる。そこで，本研究では，従属節と主節の両者から注視点を判定した[6]。また，渡邊（1996）においては，前置きの文（「えっとー，犬とカラスがいるんですね」）や，動作主が判定できない形容詞文や名詞文の注視点判定を行っていないため，本研究においても分析対象としなかった。

4．調査結果と分析

4.1. パーソナル・ナラティヴにおける視点表現と視座

日本語母語話者（NS01～NS03）と，中国人学習者（CL01～CL05）それぞれの，パーソナル・ナラティヴにおける総発話時間数と文節・節数[7]の平均を表２に示す。NS と CL の平均総発話時間数はほぼ同じであるが，文節数と節数は NS のほうが多いという傾向が見られた。しかしながら，パーソナル・ナラティヴは語る内容が個人により異なるため，トピックにより発話時間や発話量に個人差が見られた。

表２　平均総発話時間と平均文節・節数

	発話時間数	文節数 (SD)	節数 (SD)
NS（N=3）	18 分 39 秒	1201.0 (725.7)	314.7 (191.5)
CL（N=5）	18 分 34 秒	968.2 (299.9)	265.8 (92.0)

＊（　）内の数値は標準偏差

次に，パーソナル・ナラティヴにおける視点表現の平均使用数を表３と図１に示す。図１から分かるように，語る内容が個人により異なっていても，NS，CL 共に，授受表現と主観表現の使用率が高いという同様の傾向が見られた。その中でも，授受表現では授受補助動詞の「てくれる」が，主観表現では「(と)思う」の使用が多かった。

NS と CL の発話に見られた視点表現を構文的手がかりとし，視座の判定を行った。それぞれのトピックにおいて誰の視座から出来事が語られているのかを分析したところ，NS，CL 共に，「私」１人の視座から語られたトピックの割合が最も高いことが分かった（図２）。

以下は，NS と CL の発話に見られた「私」１人の視座から語られたナラティヴの例である。【 】内には視座である人物を示す。

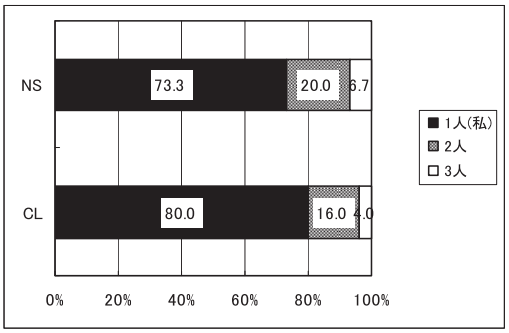

図２　NS と CL における視座人物数の比較（%）

表３　ナラティヴにおける各視点表現の平均使用数

	授受表現	受身表現	移動表現	使役表現	主観表現	感情表現	合計
NS (N=3)	23.3(31.2%)	13.0(17.4%)	6.0(8.0%)	1.7(2.3%)	19.3(25.8%)	11.3(15.1%)	74.7(100%)
CL (N=5)	13.0(24.6%)	7.4(14.0%)	6.2(11.7%)	1.4(2.6%)	18.0(34.0%)	6.9(13.0%)	52.9(100%)

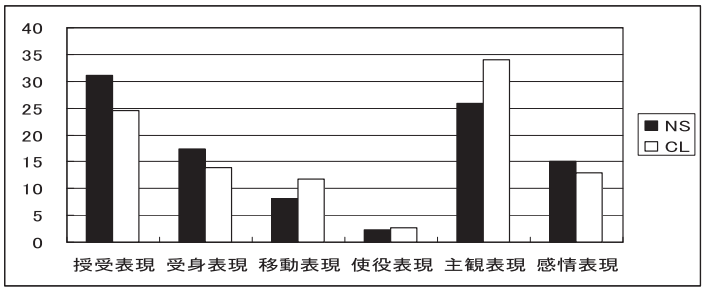

図１　NS と CL における各視点表現の使用率（%）

(1) NS 01：トピック３　感謝している人

本当に全く語学力がゼロで，聞くこともできないし，自分の意思を伝えることもできないのに，いつも学校から帰っ**てきたら**【私】，笑顔で迎え**てくれて**【私】，全く知らない，人種も違うし，言葉も違うのに，本当に家族のように接し**てくれて**【私】，息子たちも，私をお姉さんのように慕っ**てくれて**【私】，＜後略＞

(2) CL 01：トピック８　病院での不快な体験

まあ，僕はその時は，風邪，実は風邪なんですけど，まあ，学校の病院，学校のあそこの病院に行って，まあ，38度って**言われた**んで【私】，まあ，あー，病院な学校で対応できなかった。まあ，他の病院に行ってほしいって**言われて**【私】，まあ，えー，その時は，まあ医者さん，お医者さんが，渡し**てくれた**のは【私】，他の病院の何時から何時までの，まあ，営業時間のパンフレットを渡して，＜後略＞

(1) と (2) に見られるように，最初から最後まで「私」に視座を固定し，「私」１人の視座から出来事を語るナラティヴが多く見られた。一方で，僅かではあるが，「私」に加えて他者の視座が観察されたナラティヴが，NS，CL 両者において見られた。(3) と (4) はその例である。

(3) NS 01：トピック１　誕生日の思い出

その時友達が付き合っていた彼氏が，友達のために東京でヘリコプターをチャーターし**てくれた**みたいで【友達】，その中でプロポーズを**された**みたいで【友達】，ああ，月９みたいなことが本当にあるんだなあ**と思って**【私】，私はそういうことを**してもらった**【私】経験がないので，＜後略＞

(4) CL 03：トピック２　一番嫌な思い出

あの彼女は，指導教官にあの間はいろいろ**叱られて**【友達】，あの，成績が悪いとか，勉強が悪いとか，論文が悪いとか，そう毎日ほとんど先生に**叱られて**【友達】，彼女も当然気持ちがあんまり良くないことが私も知っています。＜中略＞なんか次の日も，次の次の日もしつこくあの，なんかあなたが奨学金があるんじゃないかな，あなたが私に黙っていることがありますよ，絶対に。そう突っ込んで**言われました**よ【私】。

(3)，(4) 共に，「私」の視座に加えて，「友達」の視座から出来事を語る発話が観察される。このような他者の視座は，出来事に話者が関与しない場面においてのみ見られた。つまり，話者が関与しない出来事においては，出来事に関与した人物のうち，話者にとってウチの人物の視座から出来事を語る傾向があると言える。以上の結果から，パーソナル・ナラティヴにおいては，NS，CL 共に「私」が関与する出来事においては，視座は「私」に固定されるが，関与しない出来事においてはウチの人物の視座から出来事を語ることが分かった。

牧野（1996）では，日本語における話者の「身内」と「よそもの」の解釈は発話時によって流動的であることが指摘されているため，ウチ・ソトの区別を行い，その人物の視座から語ることは，自分自身の視座から語ることより難しい可能性が高い。しかしながら，本調査の結果では，CL の発話においてもウチの人物からの視座が観察された。

だが，自己の体験を語るというパーソナル・ナラティヴの性質上，このような自己が関与しない出来事に関する発話は産出されにくく，本調査においては用例が少ない。それゆえ，(4) の CL03 の発話は，ウチの人物の視座から語ったというより，被害の意味と受身が結び付けられたことが受身文の使用に繋がった可能性も考えられる。この点を明らかにするためには，更なる調査が必要である。

4.2. パーソナル・ナラティヴにおける注視点

NS と CL のパーソナル・ナラティヴにおける注視点を判定したところ，注視点が「私」１人，「私」と他者を含む２人或いは３人以上であるトピックの割合は，図３のようになった。

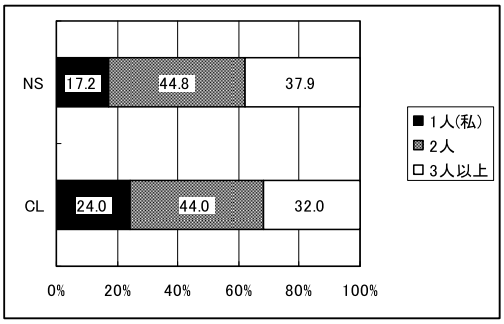

図３　NS と CL における注視点人物数の比較（%）

図３から分かるように，NS，CL 共に，注視点が「私」１人であるトピックは20%前後と少なく，ほとんどのトピックにおいて，複数の人物の注視点が観察された。以下は，CL01の発話例である。〔　〕内には，注視点である人物を示す。

(5) CL 01：トピック３　感謝している人

ずっとおばあさんと一緒に暮らしていたんです〔**私**〕。まあ，うーん，大学入学試験まで，ずっとおばあさんと暮らして〔**私**〕，おばあさんが，うーん，僕に，まあ，大学に順調に入ってほしいっていう気持ちで，まあ，高校１年，２年生くらいでおばあさんが病気になって〔**おばあさん**〕，ちょうど僕が大学入学試験の直前に，まあ，病気で亡くなって〔**おばあさん**〕，まあ最期まで僕が大学に入る，｛まあ見てなかったんですけど｝，見られなかったんですけど〔**おばあさん**〕，＜後略＞

＊｛｝内は言いよどみ

渡邊（1996）では，口頭表現（漫画描写）の場合，日本語母語話者は注視点が固定されており，反対に日本語学習者は移動するものが多いという結果が示されていたが，本調査結果では，NS，CL 共に，発話例(5)に示したように，注視点は移動していた。しかし，同じ注視点がいくつか見られた（同じ事柄に数回言及した）後に，注視点が移動しているケースがNS，CL両者において多く観察された。これは，口頭産出という連続的な言語処理が関与している可能性が考えられる。佐伯（1982）は，短期記憶の容量が限られているために，あらゆる関連事項のすべてに等しい重要度を割り当てて注目することはできないため，「視点を据える」ことが，特に注目すべき項目だけを選択的に抽出するための「注目度の配分プランの一種」であると述べている。したがって，口頭産出での心的資源への負担を軽減するために，同じ事柄や人物に数回言及して，徐々に注視点をシフトしていくという現象が見られたと推察される。

4.3. 日本語学習者のパーソナル・ナラティヴにおける視点表現の非用と不自然な使用

NS と CL のパーソナル・ナラティヴを分析した結果，視座は「私」に固定され，注視点に関しては複数の人物に移動するという同様の傾向が NS と CL で観察された。しかしながら，4.1 の表３に示した視点表現の平均使用数の合計を見ると，CL の視点表現の使用数は NS よりも少なく，視点表現の非用や不自然な使用から，視座判定の構文的手がかりとなり得なかったものがある。表４には非用と誤用の見られた視点表現の内訳を示す。表４から分かるように，授受表現の非用と誤用および受身表現の非用が特に見られた。また，誤用においては，授受動詞間や授受と受身の混同，活用の誤りなどがあった。

表４　各視点表現の非用と誤用数（非用・誤用率[8]）

	授受表現	受身表現	移動表現
非用	15(21.4%)	9(19.6%)	1(3.1%)
誤用	11(16.7%)	2(5.1%)	2(6.1%)

以下の発話例(6)は，授受表現や受身表現の非用の例である。発話例(6)では視点表現以外の表現を補うことが可能な箇所があるため，視点表現の非用であると断定することは難しいが，視点表現である授受や受身表現を補うことで発話がより自然になると考えられる。

(6) CL 01：トピック６　最悪な一日

まあ，皆が留学生でまあ，授業料免除っていう資料を**渡す(→渡される)**んで〔**学生課**〕，それから，まあ免除するかどうかまあ結果を，えーもみじで私たちに**お知らせする(→知らせてくれる)**んですけど〔**学生課**〕，その日まあ結果を**知らせる(→が知らされる／掲示される)**【**学生課**】日なんで，まあ自分が，まっ，その前に皆が，ほとんど知ってるんですけど〔**皆**〕，まあほとんど留学生が半額免除されたんですけど【**留学生**】〔**留学生**〕，まあその日もみじ見て〔**私**〕，全然免除されなかったって【**私**】**書いて(→書かれていて／書いてあって)**〔**学生課**〕，残念ながら，とかとか**書いて(→書かれていて／書いてあって)**〔**学生課**〕，＜後略＞

このように，話者自身が関与する出来事を描写する際に，視座を表す視点表現が用いられていないと，自分とは関係のない出来事を客観的に述べているような不自然な印象をもたらす（水谷 1985）。また，以下の発話例(7)に見られるように，授受補助動詞「てくれる」の使用と非用が混在している発話も観察された。

(7) CL 03：トピック３　一番感謝している人

母は，なんか仕事もしているし，家事もしているし，勉強もちゃんと見**てくれるし**【**私**】，なんかすっごく優しい人ですよ。あの，私たちのこともずっと**応援していますよ(→応援してくれています)**。私たちの，あの決定とか，決まりとかそういうものも，なんか理解**してくれて**【**私**】，**応援しています(→応援してくれています)**。

岡田（1997）において，「てくれる」の習得が先行する動詞によって左右される可能性が指摘されているため，CL03は動詞により，「てくれる」の必要・不必要を判断した可能性がある。しかしながら，特定の動

詞に限らず，動詞が連続した場合に，後続した動詞への「てくれる」が脱落しているCLの発話も見られたため，最初に「てくれる」を付与し恩恵性を表せば，後は省略しても良いと考えている可能性も考えられる。NSの発話においては，恩恵性のある出来事に対しては連続して授受補助動詞を用い，視座を表しているため，視座の出現と欠如が混在しているCLの発話は不自然に感じられる。

また，授受動詞間や授受と受身の間の混同は，意味的な不自然さ（恩恵性と被害の違いなど）だけではなく，注視点にも影響することが以下のNSとCLの発話例の比較から分かる。まず，以下のNS01の発話例を参照されたい。

(8) NS 01：トピック５　一番嬉しかった親切

全員が私の部屋に来て**くれて**【私】〔皆〕，皆で荷物を積めたり〔皆〕，スーツケースを梱包し**てくれたりして**【私】〔皆〕，知らない間に手続きをし**てくれて**【私】〔皆〕，＜後略＞

発話例(8)では，話者自身が関与する出来事に対して，「てくれる」を用いることにより視座を「私」に固定すると同時に，注視点に関しても「皆」に固定されていることが分かる。複文においては，前件と後件の主語（注視点）を一致させなければならないことが指摘されており（田中 1997），その際，視点表現は重要な役割を果たす。つまり，視点表現を使用するか否か，或いはどの視点表現を使用するかは，視座のみならず，注視点にも影響を及ぼすと言える。一方で，CLの発話には，以下に示すように（発話例(9)），視点表現の混同から，複文における注視点が一致していない例が見られた。

(9) CL 04：トピック５　一番嬉しかった親切

先生が（→に）毎週，授業をやっ**てもらって**【私】〔私〕，過去問を私にやっ**て，くれました**【私】〔先生〕。で，間違いがあった時，いつも親切で直して〔先生〕，教え**てもらいます**【私】〔私〕。

発話例(9)においては，「てくれる」を使用すべき場面で「てもらう」を使用したことで，複文の前件と後件の注視点の人物が一致しない。また，「てくれる」と「てもらう」は相手に対する働きかけの有無においても異なるため（楊 1985），文脈上，相手からの働きかけが感じられる発話例(9)においては，「てもらう」の使用が不自然であると考えられる。

上記に挙げた，「てくれる」と「てもらう」以外にも，「てくれる」と受身表現，「てもらう」と使役表現のように構文上類似しており，使用においても重なりが見られる表現（楊 1985）は，その区別が難しいことが推察される。しかしながら，どの視点表現を用いるかにより，視座となる人物だけではなく，注視点となる人物も異なるため，構文的手がかりとはなりにくい，学習者の発話に見られる視点表現の非用や不自然な使用について，今後更に細かく分析する必要があると言える。

4.4. 漫画描写における視点表現と視座

３つの漫画描写全てにおけるNSとCLの総発話時間数と文節・節数の平均を表５に示す。発話時間数はCLのほうが若干長いが，文節数と節数から見た発話量は，両者ほぼ同じであった。

表５　平均総発話時間と平均文節・節数

	発話時間数	文節数 (SD)	節数 (SD)
NS（N=3）	3分13秒	205.7 (23.2)	54.7 (6.8)
CL（N=5）	5分29秒	190.0 (33.9)	55.0 (8.9)

＊（　）内の数値は標準偏差

各視点表現の平均使用数は表６の通りである。NS，CL共に，全体的に視点表現の使用が少なく，視座判定の構文的手がかりとなる表現をあまり用いていないことが分かった。そこで，NSとCLがどのような表現を用いているのかを詳しく見るために，本研究では，中立の視座を含むため視点表現から除外した授受表現の「あげる」，移動表現の「いく」，動詞対の「貸す」の総使用数を調べた（表７）。授受表現および移動表現，「貸す・借りる」の動詞対における各動詞の総使用数を比較した結果，動作主主語（動作主寄り，または中

表６　漫画描写における各視点表現の平均使用数

	授受表現	受身表現	移動表現	借りる	主観表現	感情表現	合計
NS (N=3)	3.7(55.2%)	0.7(10.4%)	2.0(29.9%)	0.3(4.5%)	0.0(0.0%)	0.0(0.0%)	6.7(100%)
CL (N=5)	1.6(42.1%)	0.6(15.8%)	0.6(15.8%)	0.2(5.3%)	0.6(15.8%)	0.2(5.3%)	3.8(100%)

表７　NS と CL における各視点表現の総使用数

	授受表現			移動表現		動詞対	
	あげる系	くれる系	もらう系	(て)いく	(て)くる	貸す	借りる
NS (N=3)	12	0	8	8	2	5	1
CL (N=5)	11	3	4	5	1	8	2
合計	23	3	12	13	3	13	3

立の視座）の表現の使用数が多く（「あげる＞くれる・もらう」「いく＞くる」「貸す＞借りる」），口頭での漫画描写においては，NS，CL 共に，動作主主語で客観的に出来事を描写する傾向が見られた。これは，「てくれる」の使用が多く見られたパーソナル・ナラティヴとは異なる傾向であった。

また，漫画描写においては，主観表現や感情表現を使用する際に，ムード表現（「嬉しそうだ」）や，アスペクトを伴うもの（「思っている」）が多く，人称制限のある言い切りの形がほとんど見られなかった。それゆえ，構文的手がかりとなる視点表現としてのこれらの表現の使用がほとんど見られないという結果になった。

次に，NS と CL の漫画描写において使用された視点表現を構文的手がかりとし，視座の判定を行った。その結果，図４に示すように，特に NS において，視座が複数（２人以上）見られる漫画の割合が高かった。

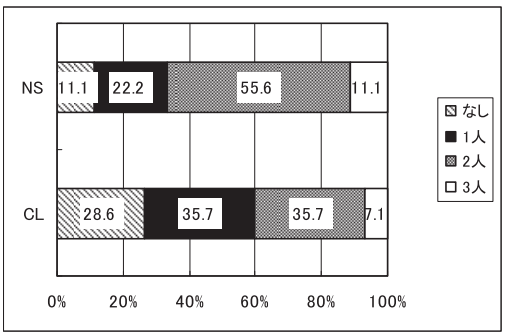

図４　NS と CL における視座人物数の比較（%）

更に，NS，CL 共に視座が全く見られない漫画があった。これは，１人の人物に視座を固定する傾向が見られたパーソナル・ナラティヴとは異なる傾向であり，同様の漫画を用いて漫画描写を実施した先行研究の結果とも一致しない。以下の (10) (11) は，複数の視座が観察された NS と CL の発話例である。

(10) NS 02：漫画２　兄弟と風船

まず，お母さんが２人の子供，お兄ちゃんと妹に，風船を１つあげます。でもやはり，兄弟２人いるので，けんかになってしまって，でもお兄ちゃんはお母さんに我慢しなさいと言って**怒られてしまい【兄】**，妹がその風船を**もらいます【妹】**。

(11) CL 02：漫画１　男の子と自転車

＊ A ＝自転車の持ち主（自転車子），
＊ B ＝掃除している男の子（掃除子）

ある日，Bさんは家で，掃除しているんですよ。ちょうど友達Aがその自転車を洗いながら声かけ**て，くれて，くれました【B掃除子】**。で，Bさんは，Aさんの自転車をすごく気になって，うらやましくて，ちょっと貸し**てくれない【B掃除子】**かな，とAさんに言いました。で，Aさんは喜んで貸し**てあげたんです【A自転車子】**。

(10) と (11) 両者において，漫画の展開と共に，視座が移動していることが分かる。これは，場面を描写するという漫画描写特有のタスクの性質が関与している可能性が高い。特に，今回使用した漫画では主人公が特定されにくく，時間的制約のある口頭での漫画描写であったことから，誰か１人の人物に視座を固定することよりも，「誰がどうした」という登場人物の動作をコマごとに描写していくことのほうに注意が注がれたと考えられる。したがって，同様の漫画を筆記により描写させた田代（1995），中浜・栗原（2006），魏（2010）の結果とは異なり，日本語母語話者においても視座が固定されなかったと推察される。

以上の結果から，パーソナル・ナラティヴにおいては，NS，CL 共に「私」に視座を固定しているのに対し，口頭による漫画描写においては，両者共に，固定視座はほとんど観察されないことが分かった。坂本・康（2002）で，筆記による漫画描写における視座統一の必要性が必ずしも高いとは言えないことが指摘されているように，口頭産出においても，漫画描写というタスクでは視座の統一が必須ではない可能性が高いことが，本調査の結果からも示唆された。

4.5. 漫画描写における注視点

NS と CL の漫画描写における注視点を判定したところ，パーソナル・ナラティヴ同様，NS，CL 共に注視点が複数の人物である漫画の割合が高かった。特に，漫画１と漫画３の登場人物が２名であることから，注視点が２人の人物であるものが多かった（図５）。

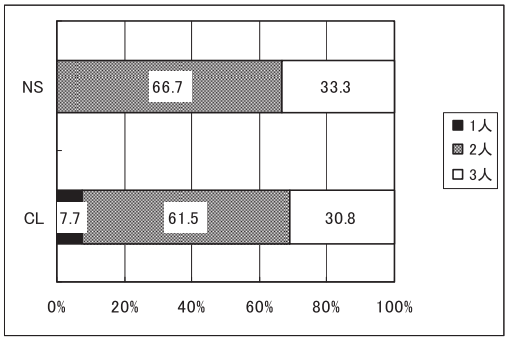

図５　NS と CL の注視点人物数の比較（%）

また，パーソナル・ナラティヴと同様に，同じ注視点を２，３回維持してから，移動する傾向が漫画描写においても見られたが，以下の発話例（12）のように，節や１文単位で変わる注視点が，NS，CL 共に見られた。これは，漫画描写において特に顕著に見られる現象であった。

(12) NS 02：漫画２　おじいさんと孫

この物語は，お父さんと娘の２人が出てきます〔**父と娘**〕。まず，お父さんの書斎に娘がお願いに行きます〔**娘**〕。そのお願いは，本を１冊，あっ，本を貸してってお願いなんですけど，お父さんは何をするのか分からないけど〔**父**〕，本を１冊貸しました〔**父**〕。だけど，娘はもっと貸してほしい，ということで〔**娘**〕，お父さんは３冊本を貸しました〔**父**〕。

（12）に見られるように，１人の人物がした行動に対して，もう１人の登場人物がどう反応したのか，２人の人物の行動を交互に描写することで，一連の出来事を描写する発話が多く見られた。それゆえ，１文や節単位での注視点の移動が多く観察されたと言える。本研究で用いた口頭産出においては，筆記とは異なり，前の発話に戻って言い直すことや，発話全体を見返す時間はないため，眼前の事態を描写することに終始したことがこのような注視点の移動につながったと考えられる。

5．まとめと今後の課題

本研究の目的にそって得られた結果をまとめると以下の２点が示される。

(1) 日本語母語話者と中国人学習者の視座と注視点の傾向には，何れのタスクにおいても大きな違いは見られなかった。

(2) パーソナル・ナラティヴと漫画描写というタスクの違いにより，視座と注視点に違いが見られた。具体的には，ナラティヴにおいては固定視座と移動注視点が見られたのに対し，漫画描写では，視座・注視点共に移動していた。

本研究では，口頭でのパーソナル・ナラティヴと漫画描写を比較することで，先行研究の研究手法を再検討した。その結果，先行研究で示された日本語母語話者の統一視座が，筆記による漫画描写というタスクの影響によるものである可能性が示された。

しかしながら，漫画描写とは異なり，パーソナル・ナラティヴにおいては，語る内容が個人により異なることから，出現した視点表現を量的に比較することは難しく，どのような視点表現が多く産出されるのかにも個人差があった。今後は調査参加者の人数やトピックの数を増やし，量的な分析も加える必要があると言える。

また，パーソナル・ナラティヴで見られた学習者の不自然な視点表現の使用が何に起因するものなのかを本研究においては特定できなかった。そのため，中国人学習者だけでなく，他の言語母語話者も加え，同一個人内での母語と日本語での発話を比較する必要があろう。

【注】

1）久野（1978）は，「視座」と同義で「視点」という用語を用いている。本研究では，先行研究で多く採用されている松木（1992）の定義に従い，「視点」は「視座」と「注視点」から成るという立場に立つ。

2）久野（1978）は，行為主体を主語の位置に据えることが一般的であるのに対し，行為対象を主語の位置に据える受身などは，話者にとって特別な理由，すなわち視点的接近があると述べている。

3）視点表現を引き出すため，過去の経験を語る内容ではないトピックが２つ含まれている。

4）本動詞「あげる」や「いく」が中立の視座を含むとし，除外されるのに対し，補助動詞「てあげる」や「ていく」は，補助動詞を用いない形が中立の視座であると考えられていることから，構文的手がか

りに含まれる（久野 1978）。

5）主観表現と感情表現に関しては，中浜・栗原（2006）に倣い，人称制限のない連体修飾の形をとるものや，伝聞・推定のムード表現やアスペクトを伴う場合は除外し，言い切りの形のみを分析対象とした。しかしながら，ナラティヴという語りの性質上，過去形や接続助詞を伴う形での出現が多いため，話者自身の感情や思考を表す場合に限り，言い切りの形以外も分析対象に含めた。

6）発話データにおいては，本来，一文として独立できる文が，接続助詞を用いて従属節として出現している場合が多いため，従属節も対象とした。しかし，従属節の中でも引用節（「と」）や名詞修飾節（「の」「こと」），連体修飾節は，埋め込まれた形であり，それ自体を文として独立させることが難しいことから本研究では分析対象から外した。

7）文節・節の判定方法に関しては，田代（1995）を参考にした。

8）非用率は「(非用数)÷(非用数＋使用数)」，誤用率は「(誤用数)÷(使用数)」により算出し，CL の授受，受身および移動表現それぞれの総使用数に占める誤用・非用の割合を示す。

【引用文献】

岡田久美（1997）.「授受動詞の使用状況の分析－視点表現における問題点の考察」『平成９年度日本語教育学会春季大会予稿集』81-86.

金宥暻（2006）.「日本語学習者の書く文章のわかりにくさについて－言語的側面と認知的側面からの原因分析」『ポリグロシア』**12**，47-59.

魏志珍（2010）.「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方－日本語の熟達度との関連性－」『日本語教育』**144**，133-144.

久野暲（1978）.『談話の文法』大修館書店

小森万里（2005）.「中級作文における分かりにくさの要因－結束性，卓立性を支える要素をめぐって－」『山口幸二先生退職記念集』197-216.

佐伯胖（1982）.『学力と思考』第一法規出版

坂本勝信・康鳳麗（2000）.「中上級日本語学習者の「視点」の問題を探る－ストーリーのある漫画の描写を通して－」『平成12年度日本語教育学会春季大会予稿集』45-50.

坂本勝信・康鳳麗（2002）.「日本語母語話者の視点の実態を探る－視座の統一度に差のある文章に対する日本語母語話者の判断調査と共に－」『平成14年度日本語教育学会秋季大会予稿集』142-147.

田代ひとみ（1995）.「中上級日本語学習者の文章表現の問題点－不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる－」『日本語教育』**85**，25-37

田中真理（1997）.「視点・ヴォイス点複文の習得要因」『日本語教育』**92**，107-118.

寺村秀夫（1982）.『日本語のシンタクスと意味　第Ⅰ巻』くろしお出版

中浜優子・栗原由華（2006）.「日本語の物語構築：視点を判断する構文的手がかりの再考」『言語文化論集』27-02，97-107.

牧野成一（1996）.『ウチとソトの言語文化学』アルク

松木正恵（1992）.「『見ること』と文法研究」『日本語学』11-9，57-71

水谷信子（1985）.『日英比較 話し言葉の文法』くろしお出版

楊凱栄（1985）.「「使役表現」について－中国語との対照を通じて－」『日本語学』4-4，59-71.

渡邊亜子（1996）.『中・上級学習者の談話展開』くろしお出版

【資料】

1．パーソナル・ナラティヴで用いたトピック

	内容
1	心に残っている誕生日の思い出について
2	今までで一番嫌な思い出について
3	一番感謝している人について
4	幼い頃の両親の教育方針について
5	今までで一番嬉しかった親切について
6	過去の最悪な１日について
7	＊海外の友達が日本に来たら，どんな接待をするか
8	病院や店の店員などの対応で不快な気分になった経験について
9	海外や国内での困った体験について
10	＊魔法使いの友達ができたら何を頼むか

＊過去の内容を語るものではないトピック

2．漫画描写において使用した漫画の詳細

漫画	タイトル（調査者命名）	コマ数	登場人物
1	男の子と自転車	8 コマ	男の子２人
2	兄弟と風船	10 コマ	母，兄，妹，男の子
3	おじいさんと孫	5 コマ	祖父，孫